

エンドール。

「世界の都」の異名を取るこの街は、この大陸の南半分を統べるエンドール王国の王都である。

半島の付け根、西に大海をのぞむ湾岸に建設されたこの都は、その地の利を活かし、古くから海外貿易で栄えてきた。

また、近年、建築家ドン＝ガアデによるボンモール方面への架橋、豪商トルネコによるブランカ方面への地下隧道の建設と、陸路も充実し、人の往来もますます盛んになっている。

さらなる発展を約束された、「世界の都」

その街で、今、世界を変える、ある「出会い」が起ころうとしていた。

ドラゴンクエスト4 移植記念二次創作小説

「私の中の炎」

～エニックス「ドラゴンクエスト4・導かれし者たち」第5章より～

第1話 「あなたに逢うために」

あさづけ兄貴

夕刻のエンドール市街、西門付近。

「ふう　　」

一人の少女が、溜め息をつきながら、東西に延びる大通りを、市の中心部に向けて歩いていた。

ミルクグリーンのカーリーヘアー。

全体にスリムな　　というよりは、抱きしめると折れてしまいそうな、そんな儂ささえ漂わせる、華奢な体格。

水色のインナーの上に大きめの^{レザーアーマー}革の鎧を着け、鞆に収まった^{ブロンズソード}銅の剣を背中に背負っている。

何か、ひどく不釣り合いな　　逆に「鎧に着られている」ような、そんな印象。

ひと目で、^{アドベンチャー}冒険者　　それも、駆け出しのそれと分かる出で立ちであった。

＊

夕陽に赤く染まる^{エンドール}大都市。
立ち並ぶ^{マーケット}市の、客を呼ぶ店員の声。
剣のつもりなのだろうか、手に持った木の枝を振り回しつつ、子供たちが駆けてゆく。

その喧騒は、まさに、そこに住む人たちの息吹。
幾多の生命の産み出す、好ましき^{ノイズ}音であった。

しかし、この少女は、そんな^{ノイズ}音とはまったく無縁であるかのように 否、むしろその^{ノイズ}音をすべて拒絶するかのように
溜め息をつきつつ、夕陽に背を押され、喧騒の中を、とぼとぼと歩いていたのである。
誰の目も引かず、誰にも気にされず 。

この少女。

名を、ディルという。

いや、確かに彼女は「ディル」と呼ばれていたし、彼女自身も、それが自分の名であると信じて疑わなかった。

しかし、それは彼女の「真の名」ではなかったのである。

「ふう ー」

再び溜め息をつくとき、ディルは、きょろきょろと周囲を見回し

「 ー つ」

何かを自分の頭から追い出すように、ぶるぶるっ、と首を二～三度振ると、また歩き出した。

＊

ディルは、街の喧騒が好きではなかった。

理由は二つ。

ひとつは、今まで17年間の生活環境が、喧騒というものと無縁の生活であったこと。

そして、もうひとつが、その17年間の生活が 自身の信じてきたものの全てが、喧

騒と怒号の中で、完膚なきまでに破壊されてしまったことである。

あの日の、声が、音が、悲鳴が

平和だった村を、大勢の^{モンスター}化物たちが襲った、あの日。
村の人たちに、家の地下室に連れ込まれ、そこで真実を聞いた、あの日。
そして、そこから再び外に出た時、目に飛び込んできた光景。

この街の喧騒が、ディルの耳の奥に染みついた忌まわしい音の記憶を、引きずり出し、呼び覚ます。

*

厳しかった父さん　　優しくかった母さん

『良く聞くんだ。お前は私たちの間に生まれた娘ではない。17年前、ある女性からこの村に託された娘なのだ』
『貴方の本当の名は<ディラジーナ>。<竜の娘>という意味なの』
『お前は生き残らなければならない。<地獄の帝王>を倒し、この世に平和をもたらすことができるのは、お前だけなのだよ』
『本当は、もっと貴方は強くなるはずだった　　でも、思ったより遥かに早く、奴らが来てしまったの　　貴方を殺しに』
『私たちは命を賭けてお前を守る。それが、お前を育てる者として　　「親」としての最後の義務なのだから』
『ディルや　　確かに、貴方には私たちの血は受け継がれていないかもしれない。でも、貴方は確かに私たちの娘なの　　それだけは信じて』

涙が、あふれ出る。

先生

剣術を教えてくれた　　「強くなれ」といつも言い聞かせてくれた

お爺ちゃん

困った時はいつも相談相手になってくれた　　魔法も教えてくれた

『ディル、お前には何もしてやれなかった　　』

『すまなかったのう、今まで本当のことを言わず、つらい修行ばかりさせて』
『奴らが来るのが早過ぎたのだ』
『もう少し時間があれば、もっとマシな呪文を教えてやれたのぢやが』
『だが案ずるな。我々がついていなくとも <竜の娘> の名が、そしてお前の光が、
お前を正しき道へと導いてくれるはずだ』
『お前の光に導かれる者も現われるぢやろう。その者たちは必ず、お前の助けになって
くれるはずぢや』
『お前は剣士としてはまだまだ未熟だ。しかし、素晴らしい素質を持っている』
『鍛えればまだまだ伸びる。ぢやからこそワシらは、お前に希望を賭けておったのぢや』
『強くなれ、ディル。もっと、もっと!』
『死んではならん。絶対に死んではならんぞ、ディル』

そして

『ディル』

シンシア

『ディル、あなたは私の妹 私の半身 そして、私たちの希望』

シンシア。

ディルの親友であり、姉であった少女。

シンシアの焼くクッキーは美味しかった。

シンシアの編んだマフラーは暖かかった。

シンシアの歌う子守り歌は、天使の声のようだった。

シンシアは、どんな時もディルの味方をしてくれた。

『何があっても、私がディルを護ってあげるわ』

シンシアは、そう言ってくれた。

あの時も

涙があふれる。

止まらない。

『私が貴方を護る。貴方を死なせはしない 絶対に、死なせはしないから』

そう言って、シンシアが唱えた呪文。生まれて初めて見る呪文。

モシャス、だった。

シンシアは、自らを、ディルとまったく同じ姿に変化させたのである。

それが何を意味するか　ディルの姿をした者が、ディルを殺しに来た者の前に敢えて立つことが、何を意味するか。

その時のディルにも、瞬時に理解できた。

シンシアは、ディルの代わりに死ぬつもりなのだ。

『ダメっ、シンシア！』

そう叫んだディルの両側の頬を、ぴしゃり、と両手で挟むように軽く打って　シンシアは言ったのだ。

『良く聞きなさい、ディル』

ディルと同じ顔。しかし、戦う女の顔。

それは、ディルが今までに見たことのない、ディル自身の　シンシアの表情だった。

『貴方は生きなければならないの。何があっても　他の誰が死んでも』

『そんなんっ！』

『言ったでしょう、何があっても護ってあげる、って』

涙を浮かべるディルを諭すように、優しい目に戻って　シンシアは続けた。

『私は貴方になる。そして私は貴方の命になるの　。いつでも一緒にいられるのだから、悲しまないで』

そう言うと、手を放すと、ゆっくり振り向いて　そのまま、言った。

『生きなさい、ディル！』

そして、走って、地下室を出ていった　。

その後のことは、分からない。

ただ、怒号と悲鳴が止んで、地下室から出て見ると　そこには、何もなかった。全てが、無に帰していた。

瓦礫の山。

かつて村だった空間。

ディルの知る、すべてのもの　。

全てが。

＊

その後、ディルは、村（だった場所）を一人で旅立ち、木こりの男の家に泊まり襲い来る^{モンスター}化物にてこずりながらも、ブランカ城にたどりついたのである。

『世界の未来は、諸君ら若者にかかっている。世界に平和を取り戻すのだ。
余も楽をするつもりはない。諸君らのために、できる限りのことをしようぞ！
世界の子らよ！ 武運を祈る！』

そのブランカ王の言葉は、何もかも失った彼女にとって、何より頼もしい物であった。

その言葉を胸に、ディルは、建造者の名を取って「トルネコの道」と呼ばれるトンネルをくぐり、今し方、ここエンドールへ着いたのであった。

しかし

エンドールで彼女を歓迎したのは、忌まわしき記憶を呼び覚ます、この喧騒だったのである。

17歳の少女には、重過ぎる記憶。

彼女には、涙を流しながら、ただ歩くだけの力しか残されていなかったのだ。

だから

「その声」を彼女が聞き流さなかったのは、まさに天の配剤だったのであろう。

＊

「　　さん？」

「えっ？」

ふと、面を上げたディル。

鈴の音色のような、女性の声だった。

空耳か？

「　　嬢さん。お嬢さん　　」

いや、確かに、確かに聞こえる。

しかも

「その、泣いているお嬢さん？」

その声は、明らかに、ディルを呼んでいた。

*

「私　？」

ディルは、辺りをきょろきょろと見回した。そして、自分に注がれている視線に、気がついた。

女性だった。

綺麗な^{ペールパープル}薄紫色のロングヘアを、銀色の^{ティアラ}冠でまとめている。
前髪も後ろに上げ、額を出しているのが、かえって理知的に見える。

その女性が、道端の小さなテントの中のテーブルの向こうから、ディルを見ていたのだ。

自分の視線にディルが気がついたのを知ると、彼女は、ほんの少し首を傾げ、にこっと微笑んだ。

天使の、微笑だった。

そして、その表情のまま、あの鈴のような声で、彼女は言った。

「よろしければ、占わせて下さらないかしら？ 貴方の進むべき道を」

*

ディルは、彼女の微笑みに、奇妙な安心感を覚えていた。

懐かしいような、奇妙な安らぎ

それが何故なのか、ついぞディルは、知る事がなかった。

その代わりに、彼女はただ、己の直感を信じたのだ。

「この人は、きっと大丈夫だ」

だから、ディルは、その女性の元へ、小走りで近づいていったのである。

*

「あ、あの 」
テントの前まで来て、ディルはその女性に、何か言おうとして 言い淀んだ。

綺麗、だったのだ。

遠くからでははっきりとは分からなかった、その女性の顔立ち。
わずかに褐色がかった肌。
少女のような、それでいて、大人の女性のような 純粋さと落ち着きを併せ持った面
持ち。
そして、澄んだ湖水を思わせる、^{ダークブルー}濃青の瞳。

テーブルの上に置かれた水晶玉に隠れて見えなかった、その女性の体。
一見、^{オレンジ}橙色の長布を体に巻きつけただけのように見える、エキゾチックな衣装。
決して特別グラマーというわけではないが、均整の取れたプロポーション 。

何も言えなくなってしまったディルが、凄く緊張しているように見えたのだろう（実際、
半分はその通りなのだが）、その女性は、ディルをリラックスさせようと、わざと大げさ
に驚いた様子で、言った。

「あらいけない。私ったら、お客様に椅子も勧めないなんて どうぞ、おかけに
なって」

「あ、はい どうも 」
何か、狐につままれたような顔で、ディルは促されるまま、テーブルの前の小椅子に腰
かけた。

もう一度、近くで、まじまじと顔を見る。
美しかった。
天使というものが本当にいるのなら、それはこんな美しい人に違いない、と、ディルは
思った。

自分の顔をまじまじと見るディルを、今度は、自分を睨んでいると思ったのか、ちょっ
とだけ困り顔をして、その女性は言った。

「ごめんなさいね びっくりしたでしょう、いきなり声をかけてしまったから」

「え？」

彼女の声で我に返ったディルが、顔を赤くして、両掌を振って否定する。

「い、いえ！　そ、そんなことないですっ！」

そんなディルの様子を見て　彼女は、もう一度「くすっ」と笑って、言った。

「自己紹介が遅れたわね。私の名はミネア　見ての通り、ここでこうやって、^{フォーチュンテラー}占い師
をしているの」

「^{フォーチュン}占い　^{テラー}師　？」

「そうよ。^{フォーチュンテラー}占い師」

ミネアは続けた。

「私も貴方も、私たちは皆、自分だけの道を歩き続ける　それが、生きるってこと。
でも、その道は時々、いくつにも分かれていたり、暗かったり、急な坂だったり
いろいろあるわよね？」

優しい口調だった。

「誰かが、そんな道の途中で、前に進めなくなったり、迷ったりした時、正しい道を
歩けるように　ちょっとだけお手伝いしてあげるのが、私の仕事なの」

ふふっ。

話し終わると、ミネアは、また、あの微笑みを見せた。

いつの間にか、ディルも、泣きやんでいた。

＊

「あの　」

まだ表情の硬いディルが、小さな声で、話し始めた。

「なあに？」

「あ、あの　どうして、私に声を？」

「それはね」

ミネアは、少しだけディルに顔を近づけて、言った。

「貴方が『迷っていた』からよ」

「えっ？」

ディルが思ってもみなかった答えだった。

「だって」

ミネアが、右手の人差し指を伸ばして、自分の顔の前で、数字の「1」を形作るような

ポーズを取った。

「あんな往來のまん中で泣いているんだもの。新米^{アドヴェンチャー}冒険者さん」

ふいっ。

またあの微笑みだ。

「あ　　」

「本当に、困っていたのが手に取るように分かったから　　放っておけなかったの。
^{フォーチュンテラー}占い師として」

ディルは、今さらながらに、自分が、衆人環視の中で、人目も気にせずに、思い切り泣いていた、ということに気がついた。そして、耳まで真っ赤になった。

「あ、あの、あの　　」

「ふい　　大丈夫よ。他の人はみんな、あまり貴方を気にしていなかったようだったから」

「　　はあ　　そっか　　良かった　　」

*

「さあ、それじゃ約束を守らなきゃね。貴方の進むべき道を占わせて下さいな」

「あ　　は、はい」

「それではまず、貴方のお名前を伺ってよろしいかしら？ 占いに必要なの」

「　　」

一瞬、ディルの表情が陰ったのを、ミネアは見逃さなかった。

名前を名乗るのをためらう少女。

警戒心が強いのかもかもしれないが、呼んだ時にすぐ走ってきたところを見ると、そうとは思えない。とすれば

（なにか、名前を名乗りたくない事情があるのね）

ミネアは声に出さずに思った。

見かけ10代半ばの少女が、自らの名前を名乗ることをためられるような事情。

それは、どうひいき目に考えても、少女　ディルにとって好ましい事情であるとは、ミネアには思えなかったのである。

こんな時、無理に名前を名乗らせたりするべきではない。かえって彼女の心を閉ざしてしまいかねないからだ。

ミネアは、そう判断した。

「ごめんなさい、もし嫌だったら、無理には　　」

そう、ミネアが言った瞬間である。

「　　ディル　　」

「え？」

「ディル、って　　いいます」

弱々しく笑いながら、ディルは、しかしはっきりと、そう告げた。

*

ディルは、あの日、父母から、自分の「真の名」を聞かされた。

「^{ディラジーナ}竜の娘」。

そして、そのまま、彼らは、帰らぬ人となった　　。

ディルにとって、「名前」とは、あの日の凄惨な記憶への扉だったのである。

そして、彼女は今、「ディル」であり、しかし同時に「ディラジーナ」でもある、非常に不安定な存在であった。

もちろん、ディルは、自分がそんな名前を持っていたことなど知らなかったし、それを知っている今でも、それを　　自分の生まれを受け入れられたわけではない。

むしろ、彼女にとっては、その名前を記憶から抹消したかった。いや、「名前」という概念すら、思い出したくなかったに違いない。

しかし、彼女は今、自らの名前、その記憶に向き合い、そして、自分はディルだ、と、そう名乗った。

ディラジーナだと名乗ることは、できなかった。

だが、それでいいのだ。

忌まわしい記憶と向き合うことで、彼女はほんの少しだけ、強くなれたのだから。

今はそれでいいのだ。

*

「分かったわ、ディル」

ミネアが笑顔で言った。彼女にも、ディルが今、「何かを乗り越えた」ことが分かったからである。

続けてミネアは言った。

「それじゃ、占いを始めるわね　でも、その前に、ふたつだけ、言っておかなければならないことがあるの」

「あ　はい　」

「まず、ひとつ。これはお客さんみんなに必ず言っていることなのだけど　」

ミネアが少し真剣な面持ちになる。

「私は、貴方も含め、皆さんに、正しい道を歩いて欲しくて占いをしているし、そのようにアドバイスしているつもりなの」

ディルは、無言で聞いている。こちらも真剣だ。

「でも、私の言うことは絶対じゃない。貴方の道を歩くのが貴方である以上、私の占いを聞いてどうするか、私の占いをどう活かすか、最後に決めるのは貴方自身なの。決めるのは貴方　これだけは、覚えておいて欲しいの」

こくり。

ディルは無言でうなずいた。

「そして、ふたつめ。これは本当に大切なこと　良く聞いてね」

ディルの目をじっと見つめながら、ミネアは続けた。

澄み切った瞳。

ディルの喉が、ごくっ、と鳴った。

「この占いは　」

しばしの沈黙。

二人の間で、空気が緊迫する。

永遠とも思われた沈黙の後。

それを破ったのは、ミネアであった。

「10ゴールドがかかるの。占い代として」

にっこり。

天使の微笑みだった。

ぷっ！

ディルが吹き出した。そして、そのまま笑いだした。

「はは、はははははははっ！」

「ふいっ」

ミネアも、つられて一緒に笑った。

それは楽しそうに、二人は笑っていた。

*

「それじゃ、始めるわね。この水晶玉　　そう、ここを覗いていて欲しいの」

ミネアが差したテーブルの上には、さっきから、結構大きな　　そう、赤ちゃんの頭ぐ
らいの大きさはある水晶玉が、クッションを下に敷き、鎮座していた。

ディルが、上から、水晶玉を覗き込む。

「わあ　　綺麗　　」

思わず、吸い込まれそうになる。

「水晶には、特別な力があると言われているの」

占いのための小物を準備しながら、ミネアが言った。

「特に、こうして、球形に加工したものは、目に見えないものを見通す力があるん
ですって」

「へえ　　」

「じゃあ、目を閉じて　　楽にして　　心を、空に　　」

ミネアに言われた通りに、ディルは目を閉じた。

「手を　　水晶玉の上に置いて　　」

目を閉じたまま、右手をそっと、水晶玉の上に載せる。

目を閉じたディルには、何も見えない。

いや、多分、他の誰にも、何も見えないに違いない。

水晶玉は、ただ、夕陽に染まるエンドールの街を透き通し、歪め、映しているだけであつた。

だが、唯一、ミネアだけは、例外であつた。

彼女には見えているのだ。

ディルの歩むべき「道」が、そのヒントが。

この華奢な少女の掌から流れ込む魂の波動が、この恐ろしく透き通った球体の表面に、ミネアだけに見える像を結ぶのだ。

「光　小さな光が見えます　」

ミネアが呟いた。

「今にも消えそうな、小さな、小さな光　」

目を閉じたまま、ディルは聞いていた。

「けれども、その光は、決して消える事はなく　少しずつ、少しずつ強くなって　」

ミネアの声の調子は、ずっと変わらない。呟くような小声。

「小さな光の周りに、他の光が集まってきます　7つの光　まるで、小さな光を守るように　えっ!？」

ミネアの脳裏に、突如としてフラッシュバックする記憶！

『あなた方は、やがてこの世の暗雲を払う光と出会います。その光は小さく、消えそうだけれども決して消える事はない。

そして、その光に導かれ、その光を守る、別の7つの光が現われる　。

あなた方は、7つの光のうちの2つになるのです。そしてこの世を救う

光を　「勇者」を探し、守りなさい。それがあなた方の使命なのです』

故郷の大陸の、港町のそばのお告げ所で、^{シスター}修道女に聞いた^{オラクル}神託。

ミネアの驚きの声が、目を閉じたディルにも聞こえた。

「そんな　これって　それじゃ、この子が　」

訝しんだディルが目を開けると、ミネアは、これまでにないほどの真剣な表情で、顔を何度も上げ下げしつつ、ディルの顔と水晶玉を見比べていた。

「？」

ミネアの態度を疑問に思うディル。

彼女をよそに、ミネアは、ディルと水晶玉を見比べ続け
そして、うつむいたまま、黙ってしまった。

肩が、小刻みに震えていた。

「そう　そうだったのね　」

「　ミネアさん？」

ミネアの顔を覗き込もうと、ディルが顔を近づけた。そして、気がついた。

「！」

水晶玉に、水のしずくが、一滴、また一滴と　落ちた。

ミネアは泣いていたのだ。

涙声で、ミネアは言った。

「やっと逢えたのね、ディル　」

「えっ？」

「私は　私たちは　」

言いながら、ミネアは、顔を上げた。

この時の、ミネアの表情。

一生忘れない、と、ディルは思った。

美しい涙。

幸せな顔。成し遂げた顔。

少し小首を傾げ、涙を頬に流しながら。ほんの少し震えながら、精一杯の微笑み。

今までも、ミネアのことをずっと「美しい女性」だと思っていたが、今のこの表情こそが、最も美しかった。

ミネアの心の全てを、この表情が見せていた。

そんな表情で、ミネアは言った。

「私たちは、あなたに逢うために、この街まで来たのよ <勇者> デイル」

「<勇者> ?」

*

赤から紫へと、その色を変えてゆく街。

この日、この時。

この街で、後に歴史に残る、ある出会いがあった。

しかし、まだ、その真の意味を知る者は、いない。

(つづく)

< 次回予告 >

ミネアに続き、勇者デイルが出会った女性 その名は ^{ファイア・ソーサレス} 炎術士 マーニャ！

おおらかな彼女の性格に戸惑うデイル。

そして、出会い頭のデイルを酒場に誘うマーニャの真意とは？

「私の中の炎」第2話 「『自分だけのもの』を」

あなたはもう見つけましたか？ 「自分だけのもの」を
